

キェルケゴールにおける教会批判の射程

舟 木 讓

I

「キリスト教を知らぬ者は宗教に関して何ら知るところはないが、キリスト教を知る者は、全ての宗教について知っているのである。」

この言葉は、20世紀初頭に行われたベルリン大学総長就任記念講演（1901年）において、A. v. Hamack によって語られた有名な一節である。現代では、極めて独善的に響くこの言葉の背後には、ヨーロッパにおいて、20世紀までに培われてきたキリスト教界の自己理解が象徴的に顕れていると言えよう。ここからは、真の宗教すなわちキリスト教であり、キリスト教にあらざるものは真の宗教ではないという極論が何の懐疑も抱かれずに正論として認知されてきたヨーロッパ社会の特殊性が垣間見られる。キェルケゴールがその生を受け活動した19世紀デンマークにおいてもその状況は充ち、またデンマークにおいては、ルター派のキリスト教教会が国教会という事情も重なり、教会に対して公然と批判の矛先が向けられるようなことは、当時極めて希有なものであったことは、想像に難くない。キェルケゴールは、そうした状況下にも関わらず、デンマークのキリスト教界の状況に対して、「キリスト教界にキリスト教を再導入する」(Pap. IV A 390) こと、そして「キリスト教を描きあげること」(Pap. X 2A61) を自らの使命と最期まで信じ、その信念に忠実に活動し、最終的に

は「殉教者」(Pap. X 1A280、Pap. X 2A18等々)としての覚悟のもとにデンマーク教会への攻撃へと導かれていったことは、周知の事実である。しかしながら、キェルケゴールの日常生活の優雅さ¹も起因し、その教会攻撃の本質が正しく理解されてきたとは言い難く、また、その攻撃は、周囲の人々からすると常軌を逸したと思われるほどの峻厳さを持って行われたため——それまでのキェルケゴール自身の社会に対する表面上の「保守性」も相まって——、教会を攻撃するという行為自体をキェルケゴール自らが本来意図した行為としてではなく、彼が晩年に何らかの精神的疾患を患いその結果引き起こされた一種の異常行動として処理しようとする向きもあった。

また、キェルケゴール自身、それまでの自らの保守性に関して、以下のように述べていることとも重なり、教会攻撃に対する解釈並びに評価に対してさらなる混乱が現在でも生じていると言えよう²。

「確かに私が、〈例外者〉でないことは、全くの自明のことである。

今まで、私は、既存の体制と向き合ったということは、全くなく、

根本では常に保守的であった。」(Pap. X 1A112)

この言葉からは、キェルケゴール自ら、社会に対して超然とした態度を取ることに徹底できず、当時の社会が陥っている危機的な状況を「水平線上の不幸

1 キェルケゴールが、父親からの遺産を受け継ぎ、定職に就くことなくその著作活動を行ったことは、キェルケゴールの思想に対する先入観と偏見を招く一要因と言えよう。但し、キェルケゴールはその生活に無反省であったのではなく、充分なる認識を有した上で、自らの目的遂行のためにやむを得無きこととして行っていたことは、日誌の次の記述からも明らかである。「私が浪費を行ったこと——神は、そのことをご存じである、私はそのことを素直に認め、わが負い目として告白をする。(中略)私の浪費は、私の創作活動と本質的に関係するのである。」(Pap. X 3A177)

2 キェルケゴールの教会攻撃に関して、主として下記の参考文献を参照した。
Malantshuk, Gregor og Søren N. H.: *Søren Kierkegaards Kamp mod Kirken*, København, 1956

な白い点」³として認識しつつも、当時の体制に対して、いかなる行動をも公然とはとっていなかったことが明白となる。

こうした事情から、キェルケゴールが真に批判の矛先を向け、闘おうとした対象は、今日でもなお、鮮明とは言い難い。また、キェルケゴールを解釈する時代状況によってキェルケゴールの活動そのものが曲解されたり、不当に低く評価されてきた感も否めない。さらに、哲学史上においても実存哲学の父としての取り扱い、ならびにドイツ弁証法神学へのその後の影響等から遡ってキェルケゴールを解釈することにより、本来キェルケゴール自身が批判と闘争の矛先を向けたはずの具体的で現実の事柄が、観念的で不鮮明なものへと変質しているともいえよう⁴。先の拙論⁵において、今日の問題である、女性と男性に関する社会的問題に対するキェルケゴールの先験的な思想を考察したが、その際にも明らかになった事として、次の事を視座に据えた上で、キェルケゴールの行動を再解釈する必要が認められるのである。

すなわち、キェルケゴールは、時代や社会と適当な距離をおいて、超然とした立場で自らの思想を構築していったのではなく、むしろ、自らを一旦「例外者」(Pap. X 2A180、2A45、2B64参照)と自己認識する事で、逆説的に「例外者」でなければ、覗き込むことの不可能なこの世の深淵を直視し、その深淵を世の人々に認識させるべく自らを犠牲としたと言っているのである。そして、その実存的帰結として彼自身の生涯を神——キリスト教の神——に献げたと見え

3 「水平線上に白い点がある。恐ろしい嵐になるはずである。しかしながら、誰一人としてそれを見ない。あるいは、見たとしてもその意味を考へることはない。否、いるのだ(後略)」(Pap. VI 3B109) この目録記述に代表されるように、キェルケゴール自身がいかに敏感に、また、いかに深刻に当時の時代を認識していたかは、疑う余地はない。

4 20世紀後半になって、「新しいキェルケゴール (a new Kierkegaard)」が再発見されつつあるとの見解も無いことはないが、それは、1970年代のベトナム戦争に代表される陰の時代に「再発見」されたように解された「新しいニーチェ (new Nietzsche)」同様、正鵠を射たものとは言い難いといえよう。この点に関しては、下記を参照。Kierkegaard: A Critical Reader: edited by Jonathan Rée & Jane Chamberlain: , Oxford, 1998.

5 「S. キェルケゴールの墮罪理解 (1) ——キェルケゴールの女性理解からのアプローチ——」(『エクス言語文化論集』創刊号、関西学院大学経済学部、2000年)

よう。その決意と自己理解をキェルケゴール自身が、次のように語っている。

「私は、最も深遠なる意味において、不幸な個性を有した人間である。極めて幼いときより、狂気の淵へと追いやられる苦しみの数々や、その深い根源を私の心と体との間にある不均衡に原因があると思われる苦しみへと、固くつなぎとめられていた、(中略) その時から私はへりくだって、しかしながら最大現の力を尽くして、イデーに仕えるようにと、自らの人生を献げてきたのである。」

(Pap. VII 1A126)⁶

このような悲壮な決意のもとでなされたキェルケゴールの著作活動は、極めて実存的で、彼の実存の内面的情熱に突き動かされたものとして進められる。それ故、そこから紬だされる思想ならびにキェルケゴールの行った社会批判の予先に対して、彼自身の実存の内面性を考慮しつつ、本稿では特に彼の日誌記述を中心に考察を加え、論究していくものとする。

II

キェルケゴールが自らを「保守的」と呼び、また、その生活故に周囲からもそう見なされていたであろうことは、先述した通りである。そして、それは、キェルケゴール自身が自らを取り巻く彼自身の実存が生きる場である、社会ならびに政治に無関心であった如くに見なされていたこととも同義と言えよう。

6 この日誌記述は、1846年すなわち、「コルサァー紙」によるキェルケゴール攻撃の始まった年に記されたものである。日付は無いものの、同攻撃が1846年の1月2日から始まり、同年10月2日に終焉を迎えたことを考えると、攻撃の最中かその終了直後に記されたものと考え得る。すなわち、キェルケゴール自身がこの世と対峙を余儀なくされ、その中から、改めて自らの使命について考察を加えたものと言えよう。

また、この記述の冒頭には、「私の著作活動全体の中で、私自身を以下のように解してきた」との但し書きが置かれ、その後、自らの生い立ちならびに、父親との関係、レギーネ・オルセンとの関係を簡潔に記した上で、自らが向かうべき方向性について、決断を込めて語っている記述なのである。

しかし、次のような記述からは、キェルケゴール自身が有していた、社会体制への観点、そうした無関心とは極めて異なることが看取される。

「今やまさに、最も大いなる不安は、ヨーロッパ全土が完全に破産してしまう方向へと進みつつあるように思われることであり、また、人々がそれよりはるかに大きな危機である——それは、理性的かつ霊的な感覚ではもはや回避不能と思われるような破産的状况である——ものを忘れてのことである（後略）」(Pap. I A328)

キェルケゴール23才の時のこの日誌には、デンマークのみならず、ヨーロッパ全土が、今まで累々と築き上げてきたものを失い尽くしてしまう「破産状態」にあることに対する深い憂慮が書き連ねられている。この時のキェルケゴールの憂慮は、その後、『今なお生きている者の手記』すなわち、彼の処女作という形を取って、世に現れることとなる。その中では、ヨーロッパを覆いつつある、ニヒリズムとそれに起因するあらゆる価値の水平化——自らのいのちを整えていくべき絶対的なものの喪失——に対して、論考が加えられている。キェルケゴールは、自らが「やがて歴史の中に必ず起こるであろう変化に」正しく関係していることを確信し、ここからその著作活動を開始したと述べる。そして、当時の時代をそのような危機に陥れた元凶を真の信仰を喪失し、真の神を見失ったキリスト教界と認識し、やがてその温床となっている教会を明確な批判の矛先に据えることとなっていくのである。更にまたその批判の射程は、デンマークの国教会のみならず、プロテスタント教会の形成へ大きな影響を与えたM. ルター本人へとやがては拡大していくこととなった。

その点に関しては、後述するものとするが、キェルケゴールの活動をより正確に理解するに際して、彼自身の自己理解、ならびに使命感に言及する必要があるであろう。以下においてその一助になると思われる、日誌記述をあげ、検討を加えていくものとする。

7 Pap. IV B64 参照。

最初に、キェルケゴール自身の自己理解に言及する。キェルケゴールは、その膨大な日誌記述の中で精緻な自己観察、自己省察を続けて行くが、中でもとりわけ特徴的で彼の活動を大きく方向付けたと思われる自己理解は、以下の記述であろう。

「(前略) すなわち父との関係、父の有する憂愁、心の奥深くに存する永遠の夜、私の罪、私の情欲と放埒⁸——それは神の目から見ればそれほど恥じ入るべきものとは見えないかもしれないが——
(後略)」(Pap. IV A107)

これは、レギーネ・オルセンとの婚約破棄事件を回想し、その理由について記述をした一部であるが、キェルケゴールは自らの精神史の中に刻まれた、家庭環境と自らの歩んできた道で犯してきた過ちに極めて誠実に対していることが看取される。そして、更に導かれる帰結として自らを次のように理解していくこととなる。

「私自身に関して考えるとき、いつも心の最奥に存する思いを語るとするならば、それは、私が一人の懺悔者だということである。
(中略) しかし、私には、特別な賜物が与えられていたのである。
それと共に、これは弁証法的でもあり、他のものに劣るところがあ

8 キェルケゴールの人生にとっての「憂愁」の正体を探ることは極めて困難であり、また、青年時代に犯したと自ら告白する「罪」に関しても特定することは、困難を極め、キェルケゴール自身が具体的に語ることがないためにいずれも想像の域を出ない。ただ、これらに関しても、日誌の中では折に触れて語られており、キェルケゴールの人生にとって、常人の想像を超える大きな影響を彼に与えていたことは確かである。日誌の中には、下記のような苦悩も散見している。
「一人の老人、彼自身が極めて憂愁であった——その原因を書くことは、はばかれる——、この老人は、年老いて息子を得る。その子はその父の全ての憂愁を受け継いだのだ」(Pap. VII 1A126)

ればあるだけこの賜物はより高いものとなるのである」

(Pap. X 1A267)

ここで言及される「懺悔者」という概念がキェルケゴールの人生を導く鍵となろう。彼は、しばしば、自らを「神の前で深くへりくだって、他の誰よりも卑しい者と見て」(Pap. X 1A280)「一人の懺悔者」という自己理解を告白する。しかし、それが同時に「純粹に理念的な意味において、他の人々より大きなスケールで真理に仕えることを可能とする機会を神より与えられた」(ibid.)として自らの使命を真理への「殉教者として歩みだしていく」(ibid., Pap. X 2A18等々)ことと理解するのである。

そして、そのような理解に立脚した上での彼の活動は、畢竟、自らと真理に対して誠実にして峻厳なものとならざるを得ない。そこには、彼が自らの内面性に徹底して沈潜しその実存から自らを如何にして取り出していくかが問題となる。そこから出てきた実存をかけた著作活動とそれに対する、社会の厳しい反応から、「真実なキリスト教は、牧師のたわ言から理解されるような類のものとは違うものである」(Pap. X 1A280)との結論に達していくこととなる。しかし、そうした苦難に満ちた歩みをキェルケゴール自身、徒勞と理解していたのではなく、常に時代に正しく関係し、自らの存在意義はやがて「歴史の中で明白となる」(Pap. X 2A4)ことを彼が同時に意識していたことも看過してはならない。

また、一方、キェルケゴールは自らを「例外者」とみなしてはいたが、「特別な階級のキリスト者」(Pap. X 2A61)あるいは「キリスト教的に完全なる者」(Pap. X 2A61)として他者を見下し、超然とした態度で社会に対峙したのではないという事実もまた、留意せねばならないことである⁹。むしろ、キェルケゴールは自らを、極めて一般的な人間でありながら、その自分に特別な賜

9 Pap. X 2A61では、自らを特別なキリスト者として主張したことはないと断言している。また、自らが通常の一人の人間であることも認めている。ただ、自らの生い立ちと、特別な賜物故に、自らの人生を「宗教的に理解する」ことでしか受け止めきれなかったと告白するのである。

物と生い立ちが与えられたため、「例外者」としての道を歩まねばならなかったと認識し、そのことに彼自身しばしば言及している。

そして、自らに付与された特別な生い立ちと賜物によって、その手に余るものとなった人生を「宗教的に理解する」ことで始めて受け止めることが可能となったと彼自身が述べている。それ故に、この世に現実存在している「宗教」のあり方に対して真摯になることがそのまま彼の実存をこの世において意味あるものとする事へと繋がり、彼がその実存の内面的情熱を傾けざるを得ない方向となったと言えよう。

以上のような事情から、キェルケゴールの活動からは、当時の宗教——キリスト教——のあり方に対して、極めて辛辣な批判が当然の帰結として出てくることとなる。例えば、キェルケゴールのキリスト教理解を象徴的に指し示す言葉として、キリスト教ならびに新約聖書は最後まで「苦しみである」(Pap. X 4A600)という表現が顕れてくる。そして、この「苦しみ」こそが、この世との「異質性」を示すものであり、その存在によって「永遠なるもの」の意識が存在し、逆に「永遠なるもの」の意識が存在するところには、「苦しみ」もまた存在するとキェルケゴールは主張する¹⁰。それ故、「この世と一体となって生きている者」が「永遠なるもの」の意識を持っていると誤解しているような、当時のキリスト教界の状況とその状況下で運営され日曜日ごとに語られる教会での説教を「たわ言」として激しい批判を加えていくのである。

さらにまた、キリスト教とは「諸々の命題の総和ではなく、人格的に仕える」(Pap. X 5A146)ものであるとの理解から、自らのキリスト教理解が「正しいか、否か疑問を有してみる」という実存の内面性における不断の反省のなかで、人はキリスト教を生きるべきであり、そこには絶えず、真理に沿って生きているか否かの逡巡の中で激しい葛藤を伴うものだとして断じていく。

こうした厳しいキリスト教理解と当時のデンマーク国教会の現状の間には、キェルケゴールにとって、容認しがたい乖離が存在していたと言いうる。国家

10 Pap. X 4A600参照

という大きな制度の中で、自らの信仰に対する主体的決断と責任が問われることなく、牧師が耳触りの良い慰安を日曜日毎に語りかける。或いは、水平化され、一般化された教義、教説ならびに正義を語ることで正統とされる礼拝。そこには、自らの全人格をかけて「単独者」として神の前に立つ実存の内面性から取り出されてくるような本来的な信仰の峻厳さは微塵も見られず、また、「永遠なるもの」との緊張関係の中では必ず存在する個別の実存状況に応じて現出してくるはずの「苦しみ」も一般化されている。その現状に対して、キェルケゴールは徹底した戦いと、本来の宗教性を回復すべきであるとの警告を発し続けたと言えよう。その回復なくしては、全ての価値が水平化、一般化された中で主体性と実存を賭けた責任を放棄して良しとする、無個性な「大衆」がはびこる世となることをいち早く預言していたのである。

Ⅲ

ここまでキェルケゴールの自己理解とキリスト教理解、ならびにそこからの帰結として出てきた、デンマーク国教会のキリスト教に対する批判について概観してきた。その後、キェルケゴールの批判の矛先は、さらに深く、プロテスタント教会そのものの内包している問題性へと向けられることとなる。それは、特に下記の記述に端的に顕れている。

「それ故、キリスト教的なるものから躰きの可能性をぬぐい去ったり、あるいは、罪の赦しというものに戦く良心の葛藤——しかしながら、ルターの卓越した理解によるならば、ここにキリスト教の全教説がかかっている——を除くならば、教会は可及的速やかに店じまいするか、あるいは、終わりのない、娯楽施設にした方が良いのである。」(SV IX 229)

本稿Ⅱ．において言及したように、キェルケゴールにとっての自己とは、まさにほころびそのものである。ほころびた自己を徹底して認識すること、換言

すれば、神の前に立ち得ない自己の実存を認識する徹底した自己否定とそれにも関わらず、質的に異なるはずの「永遠なるもの＝神」の前に立たざるを得ない「苦しみ」からしか、真の信仰、真の実存を取り戻す道はないという理解のもとにキェルケゴールは立脚している。そして、キリスト教は、まさにそうした実存の内面性を主体的内面的情熱によって掘り起こし、自己認識を要求する宗教であるとして、キェルケゴールはキリスト教を生きようとしたのであった。そして、徹底した自己省察と人間観察によって、救いへの可能性が皆無であることを知った後に始めて、人間は本来の実存を取り戻すための出発点に佇むのだ、という結論へと導かれることとなる。その結果、「信じるということは、他のいかなる自己化や、内面性とは異質なものとして、特殊的に規定される」(SV VII 602)との考えから、当時の教会が流布させている、心地よい「牧師が日曜に話すような、全ての重荷から優しく救われるといった、いつくしみ深いキリスト教の教え」(SV XII 111以下)への徹底した否を突きつけていくこととなるのである。それ故、キェルケゴールの批判は、当時のデンマーク国教会の陥っている状況に徹底した戦いを挑むと同時に、既存の体制——目に見える社会機構——に対する批判、社会批判にまでおよび、さらにはそれにとどまらず、人間実存そのものに対する批判を根底に持ったものになったと言えよう。

マランチュクという言葉を借りるならば、それは、以下のように表現が可能である。即ちキェルケゴールの体制批判は、単純に現状の社会体制に変革を迫り同じ地平での方向転換を目指すものではなく、一人一人が先ず、「単独者」となることを要求するものである。それは、通常の社会変革が、地上に存在する民族や党派、階級を再構築ないしは、「平等化」することに目的を置くのに対して、「単独者」は、外的な力や変化に影響されず、地上に存在する様々な機構、組織等々の外的権威を超えた力に服従することを学ぶからである¹¹⁾。

それ故、ルター的な全人救済的な教説は、ルター本人の内的葛藤の結果とはいえ、キリスト教本来の要求を格下げしたとの判断を最終的にキェルケゴー

11 Malantshuk, Gregor: *Politiske og sociale Aspekter i Kierkegaards Tænkning. Den Kontroversielle Kierkegaard*, København; Vinten, 1976 参照。

ルから下されることとなり、プロテスタント教会そのものが内包している「非キリスト教的なるもの」が明らかにされることとなる¹²。キェルケゴールは「ルターが関係を入れ替えて、パウロによってキリストを批判し」(SV XIV366) 大変な混乱を招いたと後年の著作において叙述することとなるが、ここにも、プロテスタントのキリスト教が内包している問題性¹³をキェルケゴールがいち早く見抜いていたことが看取される。

すなわち、キェルケゴールにとってキリスト教を本来的に伝える事は、既存の教会が行っている方法では、不可能であり、一人一人が「人格的な」関わりを持って、キリスト教を生きることをおいて他にないことが主張されるのである。これは、本来のキリスト教的真理の伝達が教会において語られる水平化され、一般化された言葉では、不可能であることをも同時に意味している¹⁴。

キェルケゴールにおいて、本来の自己を取り戻した者のみが達しうる実存段階であり、また、真の宗教性を意味する宗教性Bの段階に人が移行するには、徹底した自己省察と「永遠なるもの」との葛藤が不可欠であるとされるが、ここでは、神の前に立ち得ぬ自分を見出し、自己否定の「苦しみ」に呻吟する自己と、自己の内面性を理解するにも不完全な自己を発見し、永遠なる逡巡と「葛藤」が存在することとなる¹⁵。それ故、徹底した自己否定を含まぬキリスト教信仰は、本来のキリスト教の要求を一般化し、耳触りの良い話を垂れ流す「娯楽施設」(SV IX229参照)へと教会を変質させていく。本来「最後まで

12 『キリスト教の修練』(SV XII87以下)等々で、ルターに関する懐疑的な言及がなされる。ただ、キェルケゴールのルター理解は、キェルケゴールの精神史に沿って変化をしている。最初の親近感から懐疑、そして教会攻撃に時期を重ねるように糾弾という形を取っていく。その詳細については今後の論究に委ねることとしたい。

13 イエスの思想とパウロの思想の間にある乖離。近年のパウロ主義批判において明らかになった問題をも含むと考えられるが、本稿では、言及しない。

14 ここでは、キェルケゴールの著作活動の根幹をなす、間接的伝達という表現方法が問題となってくる。キェルケゴールは、神と人との関係においては、直接的伝達は存在しないとする。その事実を顧慮しない形で、教会においてなされる業が、キェルケゴールにとってはまさしく欺瞞とみなされるのである。(Pap. X 3A413参照)

15 SV VII194参照。

苦しみ」であるはずのキリスト教信仰をだれ一人として生きていない現実、キェルケゴールは「単独者」として「殉教」していったことが改めて浮き彫りとなるのである。

結び

以上、キェルケゴールの活動と当時の教会、キリスト教に対する批判の内容を検討してきた。『死に至る病』において明らかにされている、最終的に「飛躍」をもってしか本来の宗教性（宗教性B）に人間は到達しえないという結論は、一種の神秘主義思想を想起させるものがある。しかし、そこには、全ての価値を相対化、水平化して由とする当時のキリスト教界を含んだ、社会情勢が在ったことは、論述してきた通りである。そこには、本来自己を措定した絶対者あるいは超越者を前提として語られるはずのキリスト教が、人々の共通の体験、心情に訴えて、単に慰安を与える道具と化し、神をも理解しているかのような逆転した在り方に陥っている事への痛烈なアンチ・テーゼが込められていると言えよう¹⁶。

しかし、これはまた、今日において、皮相な社会正義と平等の名のもとに人間本来の主体性と自己責任を曖昧にし、「単独者」として本来の自己を生きる道を放棄している全ての者に対する警告としても受け止められよう。キェルケゴールが予感した時代——解体の時代——が現実のものとなって久しい今、キェルケゴールの次の言葉は、預言者的な力を持って我々に迫ってくる。

「宗教的なるもののみが、永遠というものの援助によって、人間の平等を完成できる、神的で、本質的で、彼岸的で、真である、唯

16 『キリスト教の修練』(SV XIIII以下)では、人生を深刻に考える夫に対して、妻が教会で語られる慰安に満ちた説教を是とし、主体的な判断、感性を放棄してそこにすべて委ねることを勧める箇所が出てくる。ここには、当時の一般的な教会のあり方と、そこで満足をしている「大衆」の姿が戯画化されている。ここからもキェルケゴールの考えるキリスト教（キリスト教会）のあり方と、現実が如何に乖離していたかが看取されうる。

一可能な人間の平等を」(SV VIII590)

「宗教的なもの」というと極めてドグマ的なものを想起させるが、キェルケゴールの真の「宗教的なもの」は、「宗教性 B」へと「飛躍」を遂げた者のみが生きうる世界である。「宗教性 A」から「宗教性 B」への「飛躍」、その神秘性は、「言（ロゴス）」によっては、全てが水平化してしまう世界が在ることを示していると言えよう。「言（ロゴス）」の限界性については、キェルケゴールの初期の論文「イロニーの概念」におけるソクラテスへの言及に多くの手がかりがあると思われる¹⁷が、本稿では、言及しない。ただし、「無知の知」を唱え、当時のソフィスト達の無批判的なロゴス信望への批判的行動を行ったソクラテスは、キェルケゴールの行動とも重なるところが充分にある。「言（ロゴス）」によっては、伝えきれないものが存在することを認識する、それは、人間を越えた絶対者を信じること、即ち、宗教性へと繋がるものである。しかしながら、その宗教性を、「言（ロゴス）」によって一般化したときに、それは一般化ならびに水平化された、通俗で低次な「現実」をなぞることに堕してしまう。そのことをキェルケゴールは徹底して否定し、教会攻撃、ひいては、すべてを水平化し、神を人間の側まで引きずり下ろして満足している「宗教」への批判となったと言えよう。

全てが、相対化され、絶対的なものが見失われている今日、相対的な存在としての人間を再認識する意味でも、キェルケゴールのキリスト教界、「宗教」

17 キェルケゴールは、事物の「伝達」に関して、「単独者」として孤独のうちに自らを「反省」することによってのみそれは可能であるとす。しかし、それは、また、「反省」によって導き出される、否定的な要素を有した自己による「伝達」となるため、他者からは単なる伝達とは言い得ぬものとなる。それは、事物を肯定的に単純に伝達する事は不可能となり、「伝達」された本人が主体的に「伝達」された事柄に関わって始めて「伝達」が完成するのである。従って、真の「伝達」は、ソクラテス的な「助産術」をもってして始めて可能となりうると言えよう。

キェルケゴールはそのことを「私は未だかつて誰の師となったこともない」(SV XⅢ248)、「私は教師ではない。ただ共に学ぶという者であるのみである。」(SV XⅢ664)といった表現によって自らの立場を明らかにしている。

また、ソクラテスに自らが影響されたことは、日誌「Pap. X 3A308, X 3A413 等々」にも散見される。

批判は、大きな意義を有していると考えられる。

また、ここまでで明らかになったようにキエルケゴールのキリスト教批判の根底には、ルターに対する親近と否定、あるいは、パウロの神学そのものへの懐疑等々が存するものと思われる。それらとの関係の中で、キエルケゴールのキリスト教理解と教会批判ならびに攻撃をさらに深く論究していく必要が認められるが、そのことに関しては、今後の論究に委ねるものとする。

*キエルケゴールからの引用は、国際的慣習に従い本文中に略符号で示した。

SV は、原典全集第2版、Pap. は、日誌・遺稿集第2版に依る。